

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	COVID 19パンデミック,AMRサイレント・パンデミックから何を学ぶか
別タイトル	What We Can Learn from COVID 19 Pandemic and AMR Silent Pandemic
作成者(著者)	舘田, 一博
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(1). p.1 1.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2022 041
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD09610324">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD09610324</a>

# COVID-19 パンデミック，AMR サイレント・ パンデミックから何を学ぶか

館田 一博

東邦大学医学部微生物・感染症学講座

ペスト，コレラ，インフルエンザ流行の歴史からもわかるように，感染症はいつの時代も人類の脅威となりうる疾患である。我々は今，“新病原体によるパンデミック”として新型コロナウイルス感染症（COVID-19）を経験している。約3年で6億人を超える人が感染し，約600万人以上の死亡が報告されている。たとえこのパンデミックが収束したとしても，また次のパンデミックが出現することを覚悟しておかなければならない。また，サイレント・パンデミックと称される薬剤耐性菌（AMR）の問題も喫緊の課題である。インドのニューデリーで見つかったカルバペネム耐性腸内細菌はその1例であり，この細菌から新しい耐性因子“NDM型βラクタマーゼ”が見つかり世界を震撼させたことは記憶に新しい。

COVID-19に対する治療薬・ワクチン開発は欧米がリードする形で進行した。特に世界で初めて開発されたmRNAワクチンは画期的であり，本ワクチンの開発で何百万人もの命が救われたといっても過言ではない。欧米は，本ワクチンの開発を危機管理の視点で進めており，10年以上も前からその開発を支援してきた。一方で本邦におけるmRNAワクチンの開発はどうか？医薬創薬技術において決して劣らない日本企業であるが，残念ながら欧米諸国に大きく水をあけられている状況となっている。診断法にしても，本邦における遺伝子検査の普及，新しい診断法の開

発の遅れが明らかとなった。

パンデミック，サイレント・パンデミック感染症に対する治療薬，診断法等の研究開発の難しさは世界が直面する問題である。投資規模，開発までの時間，成功確率の低さ，たとえ成功したとしても利益を回収できないリスクなど，他の疾患とは異なる問題が存在する。ビジネス原理だけでは進めることのできない感染症治療薬・ワクチン・診断法の開発には，危機管理と安全保障の視点が重要であり，すでにいくつかの国は新しい政策モデルの導入を検討している。その1例が“プル型インセンティブ”である。2023年には広島でG7サミットが開催される。その議題にパンデミック，サイレント・パンデミックが盛り込まれることは確実である。このような状況の中で，アカデミアの責任もますます大きくなっている。

東邦大学の微生物・感染症学講座は，桑原章吾先生，五島瑳智子先生，山口恵三先生によって築かれた歴史があり，基礎と臨床の融合という視点で数々の業績を報告してきた。COVID-19のパンデミック，AMRによるサイレント・パンデミックから何を学びどのように備えるのか，私たちの経験と英知が試されていると考えておかなければならない。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2022-041